

朝鮮通信使が見た京都

— 道程と滞在事例を中心に —

尹 芝 恵
中 山 祐 子

はじめに

江戸時代の朝鮮通信使と京都の関わりは深い。豊臣秀吉による朝鮮侵略後、被擄人として日本に連れてこられた朝鮮の儒学者姜沆と藤原惺窩の交流の舞台であり、国交回復に向け将軍徳川家康の真意を探るため、朝鮮から松雲大師が日本に訪れた時も家康は京都で謁見した。

柳川一件以降は、対馬の以酊庵輪番僧として京都五山¹⁾の僧が派遣された。先を急がなければならない往路でも、京都では第9回享保4年（1719）の朝鮮通信使までは余裕を持った日程が設定され、方広寺大仏殿や三十三間堂での招宴も行われた。「上使（将軍名代）問慰の聘礼」も京都だけの行事である。さらには海路で進んでいた朝鮮通信使が京都からは陸路で進むことになり、一般の人々が朝鮮通信使を見る機会が格段に増えたことも特徴として挙げられる。

また、洛中洛外図にも京都での朝鮮通信使の様子が登場する²⁾。守護家本《洛中洛外図屏風》や、今井町本《洛中洛外図屏風》に、二条城前を通る朝鮮

1) 京都にある禅宗の五大官寺で、天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺の5か寺。

2) 「平安京は中国の都をなぞって作られ、右京を長安、左京を洛陽となぞらえて呼ばれることもあった。たまたま右京は桂川の氾濫などで早くに寂れ、左京のみが長く続いた。この結果、京都は「洛」とも呼ばれるようになり、（中略）洛中は京都の市中、洛外は京都の郊外の意味である。洛中洛外図は、今日 100 点ほどの作品が知られている」水藤真『洛中洛外図屏風を読む：歴博甲本巻 11』歴史民俗博物館振興会、1999 年、10 頁。

【図1】 今井町本《洛中洛外図屏風》左隻（部分）



通信使一行が描かれる³⁾。

これまで仲尾宏（1936-2023）を中心に、京都に注目した多くの朝鮮通信使研究がなされている。しかし、朝鮮通信使が京都で辿った道程や宿泊地の研究はされていない。そこで本稿では先行研究に依りながら、京都において朝鮮通信使が通行した道程や滞在した寺社の実態把握を行う。なお、ここでは道程や宿泊地の状況をまとめるため、各使行の出来事やそれにまつわる政治的背景等は簡潔に述べる。また、各使行の呼称は江戸時代のみを考え、第1回から第12回と記す。さらに、日程は全て旧暦での表示とする。

1. 朝鮮通信使が通行した京都までの道程

(1) 淀

釜山を出発し、瀬戸内海を經由し大坂に到着した朝鮮通信使一行は、淀川を遡航した。そして川御座船で淀を目指し、淀からは陸路で京都へと向かう。

淀は現在、京都市伏見区淀の一部である。納所地区には「唐人雁木旧趾」と書かれた石標がある。江戸時代は外国人一般を「唐人」と呼んでいたため、こ

3) 実際には、朝鮮通信使は二条城前を通っていない。これは、江戸幕府の権威を表すために描かれたとみるのが妥当である。

こでの「唐人」は朝鮮通信使であり、「雁木」とは船着場の栈橋に作られた階段のことをいう。現在の淀周辺の川筋は江戸時代と異なり、かつての川筋が旧国道に重なる。船着場もこの周辺であったため石標が内陸部に位置する。

【図3】を見ると、江戸時代は唐人雁木が川沿いにあったことが分かる。

【図2】〈唐人雁木旧趾〉と現在の〈京都市淀納所〉周辺



【図3】 唐人雁木旧趾と淀城周辺⁴⁾



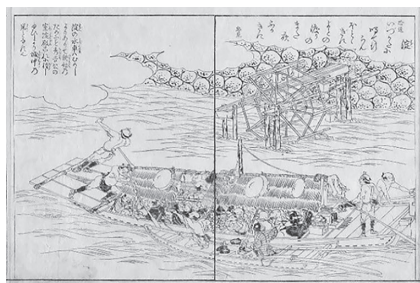
4) 寛永十四年～明治初期までの淀城周辺地に、現在の地図を重ね合わせた。

淀の町は古来より水車が有名である。淀城の北側と西側の水車は戦国時代には設置されていたとされ、江戸時代に入っても継続して使用されている⁵⁾。朝鮮には水車がなかったため朝鮮通信使も淀の水車には関心を寄せており、第11回宝暦14・明和元年（1764）の朝鮮通信使の正使・趙曦は淀で水車を見て技術を朝鮮に持ち帰ろうとしている⁶⁾。以下にその文を記す。

「城外に水車二台があつて、形状は纒の如くであり、波に従って自転しながら水を汲んで桶に注いで城外に送った。見ると甚だ不思議なので別破陣の許圭・都訓導の下僕をして詳しく其の制度と形状を見させた」

結果的に水車の技術が朝鮮に導入されることはなかったが、朝鮮通信使も注目した水車は、現在も淀の町の象徴である。京阪電鉄淀駅前には水車のオブジェが設置されている。

【図4】 左：淀の水車『都名所図会』，右：淀駅前の水車



また、淀での朝鮮通信使の様子は、第10回延享5・寛延元年（1748）の朝鮮通信使を迎えるため淀藩の役人渡辺善右衛門が書いた『朝鮮人来聘記』に詳しい。『淀渡辺家所蔵朝鮮通信使関係文書』の《通信使淀城下到着図》には、朝鮮通信使の到着時の様子が詳細に記される。

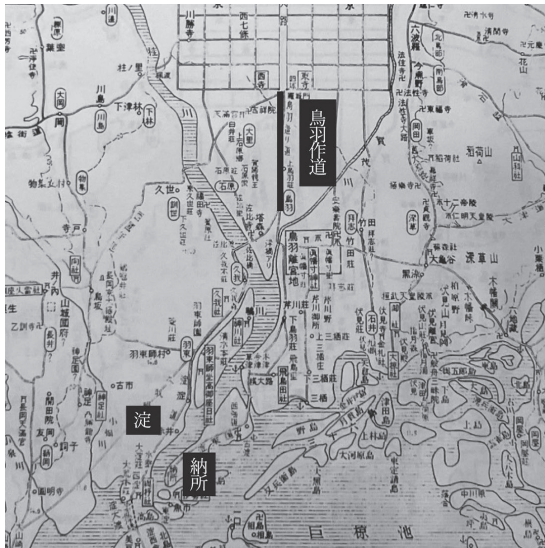
5) 佐和隆研『京都大事典』「淀の水車」淡交社、1984年、966頁。

6) 趙曦（著）若松實（訳）『海槎日記〈日記篇〉：江戸時代第十一次（宝暦・明和）朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会、146頁。

(2) 淀から京都までの道程

淀で上陸した朝鮮通信使一行は鳥羽作道を通行し洛中へ向かう。鳥羽作道は鳥羽の作（造）り道とも呼ばれる古代道路である。平安京造営に伴い羅城門から南下する道として計画的に作られた古道だが、現在は消滅し一部が鳥羽街道となる⁷⁾。

【図5】 鳥羽作道（鳥羽造り道）



朝鮮通信使が進んだ道程は一部を除き大名行列の経路をとったとされるが、参勤交代時には鳥羽作道を通行していない。参勤交代体制が未確立だった江戸時代初期、九州や中国、四国地方の大名の多くは淀ではなく伏見で上陸し、その後東海道か中山道を通行し江戸に向かった。江戸幕府による参勤交代の経路規制は、江戸時代中期までに強化される⁸⁾。このように江戸幕府が諸藩に対し京都の町を通行しない経路を指示した理由は、諸藩が京都で公家と接触するこ

7) 前掲註5「鳥羽作り道」, 670頁。

8) 丸山雍成『参勤交代』吉川弘文館, 2007年, 136～137頁。

とを嫌ったためとされる。

一方、朝鮮通信使一行は淀に上陸し、鳥羽作道を通り京都の市街（洛中）を抜け、江戸へ向かう。江戸幕府は、諸藩が洛中に入ることを嫌ったこととは反対に、朝鮮通信使には大名行列と違う道を進ませた。朝鮮通信使には京都の町を見せ、同時に公家や京都の人々にも、朝鮮通信使を見せようとした。このような江戸幕府の意図は、朝鮮通信使を利用し自らの権威を示したかったためであろうとする見方が有力である。

【図6】 大名行列の道程（例）



【図7】 朝鮮通信使行列の道程⁹⁾

以上のように、朝鮮通信使は大名行列とは異なる経路を使い、京都の町を通過し江戸へ向かったが、京都の町を通過するためには「鳥羽作道」を通る必要があった。朝鮮通信使が通行した道のうち、大名行列と異なる経路として滋賀県の「朝鮮人街道」が知られるが、淀を上陸点として京都の町を通過するため、消滅した鳥羽作道を通行していたことを示す資料は少ない。鳥羽作道での経路を明らかにすることは、今後の研究において注力すべき点のひとつである。

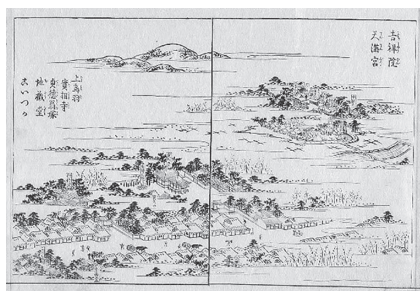
(3) 朝鮮通信使の休息所「實相寺」

淀に上陸した朝鮮通信使は、鳥羽作道を通行し最初の目的地である實相寺に向かう。

實相寺は正覚山と号する日蓮宗の寺院である。寺伝によると、南北朝時代に

9) 淀（納所）から鳥羽作道までの道程は確認できないため、空白とする。

【図8】 左：實相寺『都名所図会』，右：現在の實相寺



日像上人の弟子妙実上人が開創したと伝えられる。江戸時代は中本山格の大本寺であった。明治8年（1874）、残っていた寺中の一か寺も水害により消失したものの、現在も変わらず朝鮮通信使が立ち寄った時と同じ場所にある¹⁰⁾。

實相寺では三使及び上々官たちに対し菓子がふるまわれている¹¹⁾。第10回延享5・寛延元年（1748）、第11回宝暦14・明和元年（1764）に、實相寺における「御菓子の入札」の記録がある¹²⁾。一方、第9回享保4年（1719）の朝鮮通信使を迎える準備記録では「菓子は出さない」とされている¹³⁾。享保の朝鮮通信使は、直前の第8回正徳元年（1711）でなく、前々回の第7回天和2年（1682）の朝鮮通信使の応接に倣ったが¹⁴⁾、「前々」の朝鮮通信使の時も菓子

10) 日蓮宗正覚山實相寺（京都上鳥羽）ホームページ「沿革」<https://www.kamitoba-jissouji.net/>（閲覧 2024 年 11 月 17 日）

11) 「（前略）鳥羽の實相寺に於て、三使上上官へ御菓子を賜ふ、夫より京着（後略）」林麴・宮崎成身等編『通航一覽』「卷六十二（朝鮮國部三十八）」、泰山社、1940 年、第 2 卷 289 頁。

12) 「上鳥羽村実相寺ニ而朝鮮人江被下候御菓子并折共入札有之候間（後略）」京都町触研究会『京都町触集成』「520 寛延元年辰三月朔日」、「855 宝暦十三未二月二日」岩波書店、1983 年、第三卷 141 頁、第四卷 235 頁。

13) 「一、實相寺にて如前々、當秋も菓子は不出答に候事」前掲註 11「第五十八（朝鮮國部三十四）」、第 2 卷 233 頁。

14) 第 8 回正徳元年（1711）の朝鮮通信使は、新井白石による聘礼改革と呼ばれる改革が行われ、多くの応接も縮小された。しかし徳川吉宗が將軍になると、新井白石は失脚した。第 9 回享保 4 年（1719）の通信使を迎えるにあたり、徳川吉宗は新井白石が定めた直前の正徳信使ではなく、その前の第 9 回天和 2 年（1682）のやり方を倣う改革を行った。

は出していなかったためそれに倣ったと考えられる。

また實相寺にとって、朝鮮通信使の休息地であったことは特筆すべきことであつた。正徳6年（1716）に實相寺で勸進相撲が許可された際は、朝鮮通信使の休息所であることが勸進相撲の許可の一文に添えられている¹⁵⁾。

2. 朝鮮通信使の京都における宿泊地と道程

(1) 朝鮮通信使の宿泊地「大徳寺」

實相寺で休息、衣服を整えた一行は大徳寺へ向かう。大徳寺は京都市北区紫野大徳寺町にある臨済宗大徳寺派の大本山である。鎌倉時代に臨済宗の僧である宗峰妙超が武将赤松則村の帰依を受けたことに始まる。豊臣秀吉が織田信長の葬儀を行ったことでも知られる¹⁶⁾。

江戸時代の朝鮮通信使は、第12回文化8年（1811）を除き11回京都を通行したが、最初の3回（豊臣秀吉の時代を入れると4回）の宿泊地が大徳寺であつた。仲尾宏は大徳寺が初期の朝鮮通信使の宿泊地に選ばれていた理由を①応仁・文明の大乱から始まる戦国時代の大乱により、京都市中の大寺院も大きな損害を受け復興していない寺社が多かつたため、②天正18年（1590）にも朝鮮使節を迎えたことがあつたためとする¹⁷⁾。

15) 「一、正徳六申年、鳥羽實相寺本堂為修復相撲為取申度之旨相願候、右寺ハ朝鮮人來朝之節休息所罷成候ニ付、願之通同年日数七日赦免」岡田信子・岩生成一『京都御役所向大概覚書』「三 四十一 勸進相撲之事」、清文堂出版、1988年、上巻358頁。

16) 前掲註5「大徳寺」、577～578頁。

17) 上田正昭・辛基秀・仲尾宏『朝鮮通信使とその時代』明石書店、2001年、48～49頁。

【図9】 左：大徳寺『都名所図会』，右：現在の大徳寺



第1回慶長12年（1607）の回答兼刷還使の副使・慶暹は『海槎録』において大徳寺へ向かう道のりを次のように記した¹⁸⁾。

「閭閻（市中）の間を歩くこと一〇有余（朝鮮の一〇里は日本の一里，すなわち四キロ）の間，街衢は四通，市塵は縦横で，財貨山積，人物雲委し，観光の男女は肩をつらね足を接してたがいに踏みならしている。その数は幾千万とも知れない。往々にして涕を流すものあり，これわが国の女人であらう。感きわまって声も出ない。都を通過し，北へまわって龍宝山に至る。周囲は松や竹におおわれ，その中の大利を『大徳』という。境内に多くの寺が属す。曰く天瑞寺，総見院，甘棠院，大光院，金龍院ほか数十余院」

同じく大徳寺へ向かう道程を，第3回寛永元年（1624）の回答兼刷還使の副使・姜弘重は，『東槎録』において次のように記した¹⁹⁾。

「東寺から大徳寺に至る二十里（二里）は，商街の中を通過した。人家の稠密，市貨の豊富，男女の混雑が大坂の十倍ほどであった。街路は方正で井の字の如く，まっすぐな街路を町といい，横の街路を通といい，町と通が交錯して，そのいくばくかは知れない。見物する人は道幅に列をつくって左右に満ち，嘆息の声がかまびすしく，手を合わせて拝むのは，これを貴ぶからである。天皇の宮は市街の東方にあり，その街を過ぎるとただ，白い垣が見えるだけであった。国内では内裏と称している。」

18) 前掲註 17, 49～50 頁。

19) 姜在彦『朝鮮通信使がみた日本』明石書店，2002 年，114 頁。

両者が通った大徳寺へ続く街路を、仲尾宏は「油小路通」とする²⁰⁾。油小路通は平安京の油小路に由来し、応仁・文明の乱で四条より南は荒廃したが、豊臣秀吉が同じ場所に復興させた。現在の油小路通は京都駅の北と南では全く様子が異なる。南側は片側二車線の交通量の多い「道路」で北側は道沿いに住宅や商店が立ち並ぶ「小路」である²¹⁾。

【図10】 現在の油小路通 左：九条油小路交差点，右：油小路蛸薬師上ル周辺



京都の町の道幅は、宝永5年（1708）の大火後、道幅3間（約5.5メートル）に拡張された²²⁾。つまり、第8回正徳元年（1711）の朝鮮通信使以降は、拡張後の道幅3間の油小路通を通ったことになる。一方、慶暹（『海槎録』1607年）や姜弘重（『東槎録』1624年）は拡張前の油小路通を通り、朝鮮通信使は3間よりも狭い道幅で、人々が左右に満ち溢れているのを見た。非常に賑わっていたと推測する。

大徳寺では、三使（正使・副使・従事官）は天瑞寺（院）、対馬藩主宗義智

20) 公益財団法人世界人権問題研究センター“人権ゆかりゼミ”仲尾ゼミ『朝鮮通信使』https://khrii.or.jp/news/newsdetail_2018_08_07_2712.html（閲覧 2024 年 11 月 13 日）

21) 平凡社地方資料センター『日本歴史地名大系 27 京都市の地名』『油小路通』，平凡社，1979 年，527 頁。

22) 「一、寛永五子年三月八日焼失跡、此度町方道幅廣ク可申付候旨松平紀伊守殿江安藤駿河守・中津攝津守相覧、上ハ今出川、下ハ錦小路、東ハ寺町、西ハ油小路迄之分道幅馬踏三間、外ニ兩方壹尺五寸溝付ケ相極、（後略）」前掲註 15「三 四十 京都町道幅極之事」，上巻 358 頁。

は興臨院，家老柳川調興は聚光院，対馬の僧景撤玄蘇は大仙院に宿泊した。その他総見院，真珠庵，徳善院も使用された²³⁾。この時三使が宿泊した天瑞寺（院）は明治7年（1874）に廃仏毀釈，明治維新後の混乱で衰退し廃寺となるが²⁴⁾，大正年間に跡地に龍翔寺が再興される²⁴⁾。それ以外の寺院は全て大徳寺内に現存する²⁵⁾。

（2）朝鮮通信使の宿泊地「本圀寺」

かつて下京六条にあった本圀寺²⁶⁾に，朝鮮通信使は計7回宿泊した²⁷⁾。本圀寺も歴史は古い。日蓮宗四大本山の一つで貞和元年（1345）3月六条堀川に寺地を得て，鎌倉より下京六条に移転する²⁸⁾。寺地は広大で北側は松原通，南側は花屋町通，東側は堀川通，西側は黒門通にまで及んだが，昭和46年（1971）山科区御陵大岩に移転する²⁹⁾。

本圀寺が宿泊地として選ばれた理由も不明である。仲尾宏は「本圀寺を使用すれば京都の北に位置する大徳寺に行く必要はない。三条大橋を渡るためにも三条通より南へ宿泊した方が利便性に優れるため，本圀寺が選ばれたのではないか」とする³⁰⁾。

23) 前掲註 17, 50 頁。

24) 前掲註 5「龍翔寺」, 976 頁。

25) 前掲註 5「大徳寺配置図」, 578 頁。

26) 本圀（国）寺は，中世までは「本国寺」であった。「（前略）貞享2年（1685年）水戸光圀が母の追善供養を修して以来庇護を受け，寺名の本国寺を「本圀寺」に改めたという」前掲註 21「本圀寺」, 937 頁。第7回天和2年（1682年）の通信使までは，「本国寺」に宿泊していたが，ここでは全て「本圀寺」と呼ぶ。

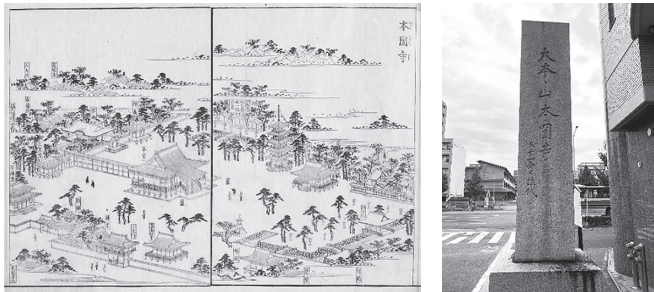
27) 第4回寛永13年（1636），第5回寛永20年（1643），第6回明暦元年（1655），第7回天和2年（1682），第8回正徳元年（1711），第10回延享5・寛延元年（1748），第11回宝暦14・明和元年（1764）と，計7回，通信使一行は宿泊した。

28) 「院宣 勅願所本国寺，今度帝都に遷され訖んぬ。長く不易の寺地となし，望みの旨に任せ，六条揚梅東西二町南北六町，全く管領せしめ，早く建造されるべきの由，院（光厳上皇）宣候所なり。仍て執達の如し（後略）」野間光辰編『新修京都叢書』「山城名勝志卷之五 貞和元年三月十日」光彩社，1965年，219～220頁。

29) 前掲註 21「本圀寺」, 937 頁。

30) 仲尾宏「朝鮮通信使と本国（圀）寺」『人権問題研究叢書 15 2014年度2015年度講演録 講座・人権ゆかりの地をたずねて：講演録』京都世界人権問題研究センター，2016年，73頁。

【図11】 左：本圀寺『都名所図会』，右：本圀寺跡の石碑



本圀寺は元々西本願寺の北側にあったが、天明8年（1788）京都三大大火と言われる天明の大火に見舞われ、経蔵などわずかを残すのみとなった。朝鮮通信使が最後に京都を訪れたのは宝暦14年（1764）であり、天明の大火は朝鮮通信使の最後の入洛から24年後の出来事である。

本圀寺と朝鮮半島との関わりは朝鮮通信使以前にもみられる。将軍足利義政の治世に「朝鮮一切経（大蔵経）」が施入されたが³¹⁾、天明の大火で焼け出された「本圀寺経蔵（輪蔵）」がこの経蔵である。大正14年（1925）に国の重要文化財に指定され³²⁾、寺院の移転に伴い昭和46年（1971）現在地である東山区山科へ移建された³³⁾。

【図12】 本圀寺経蔵（輪蔵）



31) 前掲註 21「本圀寺」，937 頁。

32) 文化遺産データベース「本圀寺経蔵（輪蔵）」<https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/200859>（閲覧 2023 年 9 月 15 日）

33) 京都市『史料京都の歴史 第 12 巻 下京区』，平凡社，1979 年，285 頁。

第8回正徳元年（1711）の朝鮮通信使を例に見ると、一行は淀から鳥羽作道を通行し實相寺へ向かう。實相寺で休息を取り三使らは装束を改めた後、再び鳥羽作道を北上し、四篠³⁴⁾から東へ向かう。そして大宮通を北上し七条通を東に進み、油小路通を北上する。松原通に到ると西へ進み本圀寺に到着する³⁵⁾。本圀寺から江戸への道のりは、西堀川通を北上し松原通を東に進み、室町通に到ると北上し、三条通に至ると東に進み、三条大橋を渡る。その後京の七口のひとつ栗田口を通過し京を出て江戸へ向かう³⁶⁾。

京都から栗田口・日野岡までの道筋の記録もある。「左右には土手が築かれ、土手の上には芝草を置き、脇は泥こてが塗られていた。通り沿いの家々には絹布の幕が張られ金屏風が構えられ、左右に埒（柵）が張られていた³⁷⁾。さらには、本圀寺から栗田口まで、町々の辻々に京都両町奉行の与力・同心が警護として配置された。与力衆は麻上下を着用していた³⁸⁾（筆者訳）」。

以上を踏まえ、第8回正徳元年（1711）の朝鮮通信使の道程と本圀寺、實相寺の位置を【図①】に示す。

（3）朝鮮通信使の宿泊地「本能寺」

京都での朝鮮通信使の宿泊地は、第9回享保4年（1719）のみが本能寺に宿泊した³⁹⁾。本能寺が宿泊地となった理由も不明である。本来の使館である本圀寺が何らかの理由で大破し使用できず、本能寺に変更したという記録はあるも

34) 後掲註 41「四塚」と思われるが、詳細は不明。

35) 「入京之道筋 淀より鳥羽海道へ出、鳥羽之實相寺に而休息仕装束改、其より四篠東江、大宮通七篠東江、油小路江、松原江出、西江行本國寺江着」前掲註 11「卷百十七（朝鮮國部九十三）」、第3巻 372 頁。

36) 「一信使通り筋、本國寺より西堀川を松原迄、松原より東へ、室町を上へ三篠通迄、三篠通を栗田口日野岡へ」前掲註 11「卷五十五（朝鮮國部三十一）」、第2巻 180 頁。

37) 「京都より日野岡迄之道筋、左右に土手を築き、上は芝草を置、脇は泥鍔塗也、家々には絹布之幕を張、金屏風にて構ひ、左右に埒を結び有之」前掲註 11「卷五十五（朝鮮國部三十一）」、第2巻 180 頁。

38) 「一本國寺より栗田口迄、町々辻々に兩町御奉行より警固として、與力同心被指出、與力衆は麻上下着也、大津迄之道筋別而入念有之」前掲註 11「卷五十五（朝鮮國部三十一）」、第2巻 180 頁。

【図13】 左：本能寺『都名所図会』，右：現在の本能寺



の⁴⁰⁾，本能寺が宿泊地に選ばれた理由は明らかになっていない。

休息所である實相寺から本能寺への道程は次の通りである。四塚⁴¹⁾を東へ進み，大宮通を北上し七条通を東へ進む。油小路通に到ると北上し松原通へ，松原通を進み室町通に到ると再び北上し三条通を東に進み寺町通から本能寺へ向かう。宿泊地である本能寺からは寺町三条通を進み三条大橋を渡る。そして蹴上を通過し江戸へ向かう⁴²⁾。江戸よりの帰国時は，本能寺から大仏殿に立ち寄りそのまま淀へ向かう⁴³⁾。その道程は，本能寺を出発し三条寺町から三条通へ進み，大和大路通に到ると南下し大仏殿に向かう。大仏殿と三十三間堂に立ち寄った後は，大仏正面通より伏見街道を進み五条橋を通過し寺町通を北上，四条通で西に向きを変え，室町通へ向かう。室町通からは往路と同じ道をたどる

39) 「本能寺の変」で有名な同寺であるが，朝鮮通信使が宿泊したのは，本能寺の変が起こった場所とは別地である。本能寺は天正 10 年（1589），豊臣秀吉による区画整理後に現在地に移転された。前掲註 5「本能寺」，844 頁。

40) 「（前略）先御代々は朝鮮人旅館は，本圀寺に定候得とも，當年寺院殊の外大破に付如軒」前掲註 11「卷六十（朝鮮國部三十六）」，第 2 卷 266 頁。

41) 「平安京の中心を南北に走る朱雀大路（現千本通）の南末，九条大路に設けられていた羅城門旧跡付近の地名。鳥羽作道から京中への入口にあたり，交通の要塞であった」前掲註 21「四塚（よつづか）」，1001 頁。

42) 「一参向之節ハ，四塚の大宮七条，油小路松原，室町三条，寺町本能寺江，夫の寺町三条通蹴揚迄，（後略）」前掲註 12「971 朝鮮人来朝ニ付，参向并帰国道筋町々江可申聞口触之覚」，第一卷 300 頁。

43) 「大仏三十三間堂へ被立寄候而者淀着」九州国立博物館『対馬宗家文書』「大雲院実録 享保四年十一月」，コマ 320 <https://souke.kyuhaku.jp/photo/11879.html?p=5&m=1>（閲覧 2024 年 11 月 1 日）

というものだった⁴⁴⁾。

この時の経路を【図②】に示す。

次に本能寺が宿泊地となった際の状況を、通航一覧「卷之六十（朝鮮國分三十六）」より見る。堺町通は「御所通」といい、柳馬場通、高倉通は「往来通」という名の通り、「人馬の者（輸送用の馬と人）は、堺町通は通らないように」と周知されている⁴⁵⁾。堺町通は、豊臣秀吉の市街改造計画により、天正18年（1590）に開かれた⁴⁶⁾。現在も堺町通の北起点に京都御所堺町御門があり、京都三大祭のうち葵祭と時代祭は、京都御所建礼門前を出発し堺町御門をくぐり市内へ入る。このような御所の門へ続く道であるため、堺町通は「御所通」と呼ばれ、特別な道であるため人馬が通ることはできず、輸送用の馬と人は堺町通から一本東の柳馬場通と西の高倉通を通行した。また、姉小路通と柳馬場通の交差する四差路の東側には、馬のものが宿泊した⁴⁷⁾。現在その周辺は住宅の中に商店が点在する。

朝鮮通信使の京都・本能寺での滞在を任された本多下總守⁴⁸⁾は、大雲院へ宿泊した⁴⁹⁾。大雲院は二条烏丸に創建され、豊臣秀吉の市街改造計画により天正18年（1590）寺町通四条に移転した⁵⁰⁾。四条通に近い大雲院の周辺は、戦後京

44) 「一帰国の節ハ、三条寺町本能寺江、夫ハ三条通大和大路、大仏正面辺、伏見海道五条橋通、寺町四条室町迄、夫より参向之道筋四塚エ罷通候、（後略）」前掲註12「971 朝鮮人来朝ニ付、参向并帰国道筋町々江可申聞口触之覚」、第一巻300頁。

45) 「堺町通は御所道と云、柳馬場高倉通は人馬往来道と云、依之、人馬のものは堺町通は除候由、辻固之説御物語」前掲註11「卷之六十（朝鮮國分三十六）」、第2巻260～261頁。

46) 「以前は、丸太町通から一本上がった出水通まで通じていたが、宝永五年（1708年）に、内裏炎上に伴う内裏敷地が丸太町通まで拡張したため、丸太町通以北は通りが消滅した」源城政好・下坂守編『京都の地名由来辞典』東京出版社、2005年、212頁。

47) 「一姉小路柳馬場東へ入町、馬のもの寄宿」前掲註11「卷之六十（朝鮮國分三十六）」、第2巻261頁。

48) 「享保四年二月朝鮮人御用被仰付之、左之通、（中略）京本能寺休 江州膳所城主七萬石御譜代衆 本多下總守」前掲註11「卷五十八（朝鮮國部三十四）」、第2巻225頁。

49) 「一寺町大雲院は、本多下總守殿家中下宿」前掲註11「卷之六十（朝鮮國分三十六）」、第2巻261頁。

【図14】 堺町御門（時代祭の際の様子）



【図15】 現在の〈油小路柳馬場東入〉周辺



都市街の中心地となる。その影響もあり昭和37年（1962）東山・今熊野に南谷別院を開設，昭和48年（1973）には本院も東山山麓の真葛ヶ原に移転する⁵¹⁾。大雲院跡地には現在，大雲院の鎮守社であった火除天満宮社のみが残る⁵²⁾。

【図16】 大雲院『都名所図会』



【図17】 火除天満宮（大雲院跡）



朝鮮通信使たちは本能寺に宿泊し，妙満寺には日本の役人，代官，五山の僧が宿泊した⁵³⁾。妙満寺も歴史は古く，創建の六条坊門室町から天正11年（1583）豊臣秀吉の市街改造計画により寺町二条に寺地を移す。以降400年同地で栄え

50) 前掲註 5「大雲院」566 頁。

51) 本山龍池山大雲院 ホームページ「京都三遷の歴史」https://www.daiunin.or.jp/kyoto_sansen_history/（閲覧 2023 年 9 月 13 日）

52) 火除天満宮は，大雲院の開基貞安が同院の鎮守として，慶長 2 年（1597）に建立された。前掲註 21「貞安前之町」，843 頁。

昭和43年（1968）左京区岩倉に移った⁵⁴⁾。現在寺町二条の跡地には京都市役所が建つ。京都市役所北側には発掘調査で出土した妙満寺の石列が移築されている。

【図18】 左：妙満寺『都名所図会』，右：移築された妙満寺跡の石列



対馬藩主宗義誠は高瀬川沿いの対馬藩邸に宿泊した⁵⁵⁾。河原町の対馬藩邸跡は高瀬川沿いの石碑と、舟屋跡と考えられる遺構が残る。

【図19】 左：対馬藩邸跡の石碑，右：高瀬川沿いの対馬藩邸の舟屋跡



53) 「本能寺の内は、惣て朝鮮人の旅館になる、夫々の張札あり、妙満寺は惣て日本の諸役人、代官衆、五山の僧衆宿坊」前掲註11「卷之六十（朝鮮國分三十六）」、第2巻261頁。

54) 前掲註5「妙満寺」、896頁。

55) 「対馬守殿は河原町町自分の御屋敷へ御着の由」前掲註11「卷之六十（朝鮮國分三十六）」、第2巻261頁。

ここまで述べた位置関係を図に示すと【図③】の通りである。

第9回享保4年（1719）の朝鮮通信使の宿泊地である本能寺は、当時も規模の大きな寺院であった。しかしその本能寺でも朝鮮通信使一行の宿泊のためには、御堂や塔頭など全てを明け渡す必要があった。江戸幕府の命を受けた本能寺は、朝鮮通信使の受入は名誉であるが「後代願ハ再無之様云々」という記録の通り、煩わしさを持っていたことも見て取れる⁵⁶⁾。

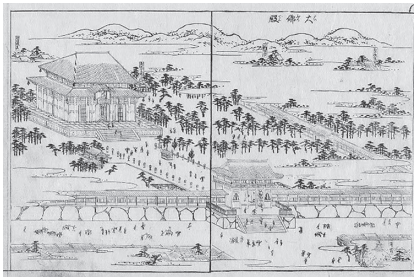
3. 朝鮮通信使と方広寺大仏殿

朝鮮通信使の方広寺大仏殿訪問の状況は、【表1】の通りである。

(1) 方広寺大仏殿訪問

京都市東山区の方広寺は天台宗に属し、大仏殿とも呼ばれた。昭和48年（1973）大仏殿は焼失し現在は本堂・大黒天堂・大鐘楼が残る。豊臣家滅亡のきっかけとなった「国家安康」の銘を記した釣鐘で有名である⁵⁷⁾。

【図20】 左：大仏殿『都名所図会』⁵⁸⁾、右：現在の方広寺



56) 「同四己亥九月朝鮮人来朝，以公命為於当寺于寄宿，十一日晚方来 此間十一月朔日江戸へ帰来，四日二下坂 依之今年七月宋師与ハ榮師定性院へ御移，塔頭内有下人分九ヶ寺ハ■共居円光院，無男十院ハ詮量院江移居，諸堂共二明ヶ渡也，南側四坊ハ下官，西側之南三八中官，吉祥院・光承院ハ通辞，本行院ハ五山，蓮承院ハ上官，実教院・知見院ハ代官，逕蔵ハ会所，其余七坊相（ママ）対馬守寄宿也，後代願ハ再無之様云々」藤井学・波多野郁夫『本能寺史料』『両山歴譜』日唱本（記録編），思文閣，2002年，491頁。なお対馬守は，通航一覧では，対馬藩邸に宿泊したとある（前掲註55）。これについては，今後調査が必要である。

第2回元和3年（1617）、朝鮮通信使は初めて方広寺大仏殿を訪問した。この時一行は同年8月に京都に到着しているが⁵⁷⁾、二代目大仏の竣工は元和3年（1617）年3月であるため朝鮮通信使たちは完成したばかりの大仏を見ている。その後の第4回寛永13年（1636）は雨で大仏殿見学は中止されたにも関わらず、第5回寛永20年（1643）には朝鮮通信使側の希望により急遽大仏殿見学を行う⁶⁰⁾。この時の急遽の大仏殿見学に伴い、以降大仏殿と三十三間堂での招宴が定例化されたが、第9回享保4年（1719）を最後に大仏殿での招宴は行われなくなった。

大仏殿は豊臣秀吉が奈良東大寺大仏を模して創建した。しかし、数々の天災等により初代を含めて四度建立されている。初代大仏殿は文禄2年（1593）に上棟、文禄4年（1596）に竣工したものの3年後の慶長元年（1596）の地震の影響で大仏殿の地盤は二寸ほど沈下、大仏も大きな被害を受けた⁶¹⁾。その後豊臣秀頼により二代目大仏が建立され慶長17年（1612）3月工事が終了する⁶²⁾。江戸中期作の《京都大仏殿絵図》は二代目大仏の記録図であるため、第2回元和3年（1617）の朝鮮通信使一行はこの大仏を見たことになる。

このように再建されたにも関わらず二代目大仏も寛文2年（1662）の地震により破損する。その結果寛文4年（1664）より三代目大仏造立が開始され、寛文7年（1667）落慶した。第7回天和2年（1682）、第8回正徳元年（1711）、第9回享保4年（1719）の朝鮮通信使は三代目大仏を見た。

しかし、この三代目大仏も数度の天災の被害を受け⁶³⁾、寛政10年（1798）に

57) 前掲註5「方広寺」、264～265頁。

58) 「大仏殿は、寛政十年（1796）に雷火により焼失した。図会に描かれているのは、この焼失前のものである」阿部泉『京都名所図会』株式会社つくばね舎、2001年、26頁。

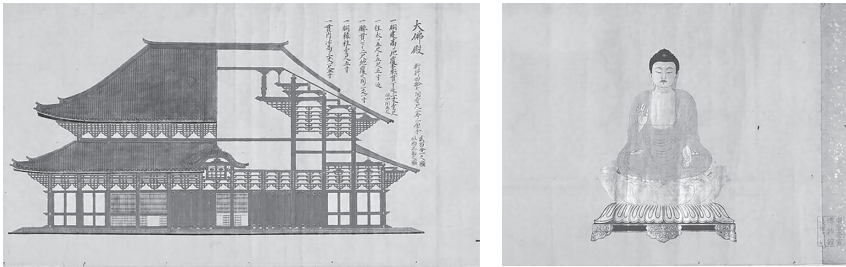
59) 「元和三年八月朔日朝鮮人來朝、按するに、入洛せしは八月廿一日なり、この書朔日に係しは、誤りなるへし」前掲註11「卷四十八（朝鮮國部二十四）」、第2巻95頁。

60) 「一書致啓上候然者京都大仏信使見物仕度之由申が候如何見物為仕可申候哉」東京国立博物館デジタルライブラリー／『寛永廿癸未年朝鮮信使記録 卷九』「八月九日条」、<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/2274>、コマ39-40（閲覧2024年11月14日）

61) 村山修二『京都大仏御殿盛衰記』法藏館、2003年、114～116頁。

62) 前掲註61、117頁。

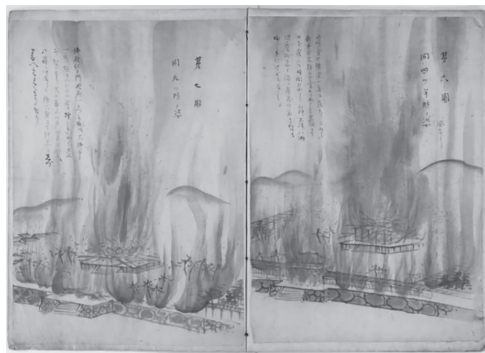
【図21】《京都大仏殿絵図》(部分)



大仏殿への落雷により全焼する。朝鮮通信使一行が最後に大仏を見たのは第9回享保4年（1719）であるため、全焼は約80年後のことである。

江戸中期に写されたとされる《洛東大佛殿出火圖》は、この時の大仏殿の火災を描いたものとされる。

【図22】《洛東大佛殿出火圖》(第六, 七図)



寛政10年（1798）の火災後、天保14年（1843）に四代目大仏が再興されたが、四代目の大仏も昭和48年（1973）に焼失する⁶⁴⁾。以降大仏殿が再建されることはなく現在跡地は「大仏殿跡緑地公園」となっている。

63) 宝永4年（1707）の地震による石燈籠が倒れ、宝暦5年（1775）は大仏殿西北隅の松の木に落雷が起きた。前掲註 61, 148～149 頁。

64) 前掲註 5「方広寺」, 821 頁。

【図23】 左：大仏殿公園入口、右：大仏殿公園



(2) 方広寺大仏殿を訪問した際の道程

第8回正徳元年（1711）の朝鮮通信使が大仏殿に立ち寄った際の道程は、次の通りである。一行は三条通より大和大路を南下し方広寺へ向かう。そして方広寺で大仏殿を見学、招宴が行われた後大仏正面通より伏見街道を北上し五条橋へ向かう。五条橋を渡ると西へ進み寺町通を北上する。四条通に到ると四条通を西へ向かい、室町通に到ると南下する。そして松原通を西へ進み本圀寺に到着する⁶⁵⁾。

ここで特記すべきこととしては、大仏殿よりの帰路一行が「耳塚」の横を通ったことである。耳塚とは、文禄・慶長の役で日本に持ち帰られた朝鮮人および明兵の戦死者の鼻を吊ったものである。元々は「鼻」を埋めたはずの「鼻塚」がいつしか「耳塚」と言い換えられたとされる⁶⁶⁾。

この耳塚横の通行について、朝鮮通信使としては同胞の耳（鼻）を祀った塚の横を通ることは深い憤怒を抱くものであった。朝鮮通信使が「回答兼刷還

65) 「江戸より登り之道筋 三條通より大和大路下る大佛殿見学、大佛にて御馳走在之、大佛正面より伏見街道上江、五條橋通西江、寺町上江、四條西江、室町下江、松原西江本國寺江」『通航一覽』「第三 第百十七（朝鮮國部九十三）、372～373 頁。

66) 「鼻塚」が「耳塚」に言い換えられたことにつき、仲尾宏は、林羅山により書かれた『豊臣秀吉譜』に書かれた「耳塚」という言葉がその後の京都案内記により広められたため、とする。金洪圭『秀吉・耳塚・四百年：豊臣政権の朝鮮侵略と朝鮮人民の闘い』『朝鮮通信使と耳塚－江戸時代の「耳塚」観と壬辰・丁酉戦乱－仲尾宏－』雄山閣出版、1998 年、97～99 頁。

使」と呼ばれた第1～3回の使行録に耳塚に言及する記録がある。第1回慶長12年（1607）の副使・慶暹（慶七松）は『海槎録』において以下に述べる⁶⁷⁾。

「日本の都の東郊に、我が国の人の鼻塚がある。思うに日本国が互いに戦う時に必ず人の鼻を切ってあたかも耳を切って献じたようにしたものである。それ故壬辰倭乱のときに、我が国の人の鼻を集めて、一か所に埋め、土を盛って塚をつくったものである。」

さらに、第2回元和3年（1617）の従事官・李景稷も『扶桑録』において前述『海槎録』の内容に加え「（前略）このことを聞いて、骨にしみる痛憤に耐えられなかった⁶⁸⁾。」、第3回寛永元年（1624）の副使・姜弘重も『東槎録』も「（前略）これを聞くに及んで痛憤の心を禁ずることができなかった⁶⁹⁾。」と記す。

その後も、雨により中止された第4回寛永13年（1636）年を除き、大仏殿での招宴は続けられるが、朝鮮通信使側が耳塚について言及した記録はない。しかし、第9回享保4年（1719）朝鮮側は「大仏を作ったのが秀吉である」として大仏殿での招宴を拒む。日本側は現在の大仏は徳川家綱の治世に再建された大仏であると説明し、朝鮮側も本意ながらこれを受け入れ招宴に応じたが、この時を最後に大仏殿前での招宴は行事から外される⁷⁰⁾。

また、第8回正徳元年（1711）、第9回享保4年（1719）の朝鮮通信使の際は、朝鮮通信使一行が耳塚の横を通行する時耳塚は見えないよう竹垣で覆ったことが記録に残る⁷¹⁾。

第8回正徳元年（1711）の朝鮮通信使の道程と耳塚の位置を【図④】に示す。

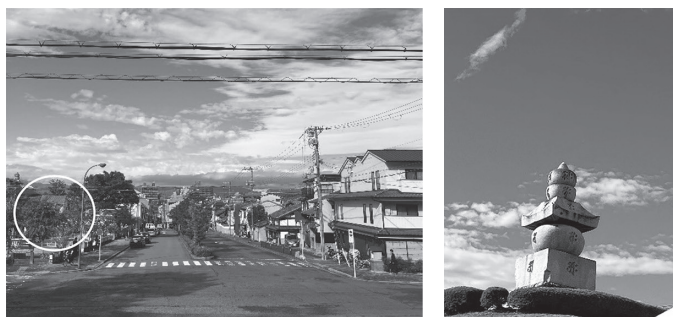
67) 慶七松（著）若松實（訳）『江戸時代第一次（慶長十二年）朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会，1997年，34頁。

68) 李景稷（著）若松實（訳）『扶桑録：江戸時代第二次（元和三年）朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会，2000年，74頁。

69) 姜弘重（著）若松實（訳）『東槎録：江戸時代第三次（寛永元）朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会，1998年，108頁。

70) 仲尾宏「朝鮮通信使と本能寺：一七一九（享保四）年の出来事」『人権問題研究叢書3 朝鮮通信使と京都』京都世界人権問題研究センター，2011年，248～249頁。

【図24】 左：現在の大仏正面通と耳塚（白枠部分），右：耳塚慰霊塔



おわりに

朝鮮通信使一行は、大坂より淀川を遡航し淀に上陸した。参勤交代時は利用しない淀に上陸し、鳥羽作道を通行し京都の町へ向かう。そして当時も京都の中心であった三条通、四条通を通行し、三条大橋を渡り江戸へ向かう。諸藩が公家と接触するのを防ぐため、諸藩には洛中を通らない経路を使わせた江戸幕府が、朝鮮通信使には京都の町を見せ、京都の公家や人々にも朝鮮通信使を見せようとした。

そして、朝鮮通信使は上陸した淀で水車を見た。朝鮮通信使が見た淀の水車はすでに消滅したが、淀駅前には当時を偲ぶ水車のモニュメントがある。また淀から京都の町へ向かう時に通行した鳥羽作道も、現在は消滅したが一部が鳥羽街道として残る。四度目の焼失後、再建されることのなかった方広寺大仏殿はその跡地が公園になる。

一方、朝鮮通信使一行が宿泊した本圀寺、妙満寺、大雲院などは移転し新たな地で現在に続く。一行が通行した三条通、四条通、油小路通をはじめとした道路、滞在や宿泊、見学を行った實相寺や本能寺、方広寺は、江戸時代と同じ

71) 「正徳年信使大仏へ被立寄候節耳塚をかこはれ、享保年ニも其例を以朝鮮人之見申様ニ被成候」雨森芳洲（著）田代和生（校注）『交隣提醒』「27 日光行きと方広寺耳塚（通信使）」、平凡社、2014年、94頁。

場所に現存する。さらに耳塚では、現在も400年前の戦争の犠牲者によりなった朝鮮半島の人々を弔う祭祀が行われている。2024年度も겨레얼살리기국민운동본부⁷²⁾主催により「제 17 회 겨레얼살리기 교토이비총위령제⁷³⁾」とした慰霊祭が耳塚前で行われた⁷⁴⁾。この慰霊祭には、民族再生国民運動本部の関係者をはじめ、駐大韓民国大阪総領事，駐大阪韓国文化院長，京都，大阪の民団関係者など約180人が参加し，伝統的な祭礼法に従い，儀式が執り行われた⁷⁵⁾。

ここまで朝鮮通信使が見た京都を，道程と滞在事例を中心に整理，考察した。京都では朝鮮通信使たちの足跡が現代に続く。江戸時代と景色は変わったが，朝鮮通信使が通行した道や宿泊，滞在，訪問した寺院等を通し，朝鮮通信使の意義を再確認できるといえる。日本と韓国の相互理解のためにも今後も京都における朝鮮通信使の足跡の整理，研究が必要であると考ええる。

【図25】 慰霊祭の日の耳塚



72) ギョレオル活動国民運動本部，在日本大韓国民団ホームページ「耳塚」，<https://mindan.org/index.php>（閲覧 2024 年 11 月 17 日）

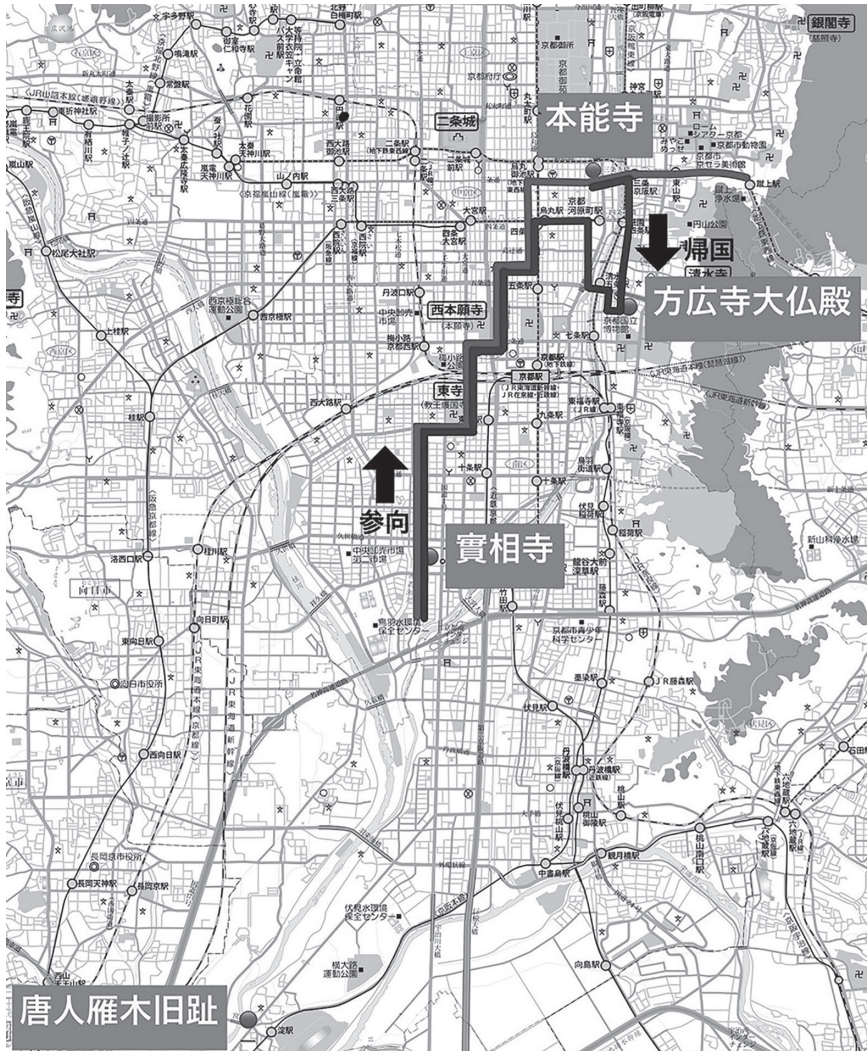
73) 第 17 回民族再生京都耳鼻塚慰霊祭，筆者翻訳。

74) 筆者確認，2024 年 10 月 23 日。

75) 筆者翻訳，국민일보 2024-10-25 「겨레얼살리기국민운동본부 ‘교토이비총위령제’ 봉행」
<https://www.kmib.co.kr/article/view.asp?arcid=0020658790&code=61121111&cp=na>（閲覧 2024 年 11 月 7 日）

【図①】 本圀寺が宿泊地の場合の道程

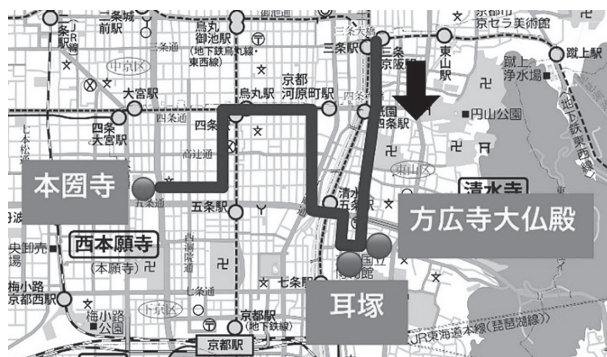
【図②】 本能寺が宿泊地の場合の道程



【図③】 第9回享保4年（1719）の朝鮮通信使の宿泊地



【図④】 第8回正徳元年（1711）朝鮮通信使の大仏殿を通った際の道程



【表1】『大仏殿訪問状況』

第1回	慶長12	宣祖40	1607	東福寺, 三十三間堂, 清水寺, 東福寺, 知恩院
第2回	元和3	光海君9	1617	大仏殿訪問(初), 三十三間堂
第3回	寛永元	仁祖2	1624	大仏殿(三十三間堂の記載はない)
第4回	寛永13	仁祖14	1636	雨により中止
第5回	寛永20	仁祖21	1643	大仏殿, 三十三間堂(信使側の希望で急遽)
第6回	明暦元	孝宗6	1655	大仏殿, 三十三間堂(以降定例化)
第7回	天和2	肅宗8	1682	大仏殿, 三十三間堂
第8回	正徳元	肅宗37	1711	大仏殿, 三十三間堂
第9回	享保4	肅宗45	1719	大仏殿, 三十三間堂(従事官参加せず)
第10回	延享5/ 寛延元	英祖24	1748	中止, 以降行われず

【表2】『朝鮮通信使関連の現在の状況』

淀の水車	消滅	京阪淀駅前に水車のオブジェあり
唐人雁木	当時と同じ場所	石碑あり
鳥羽作道	消滅	一部が鳥羽街道
實相寺	当時と同じ場所	
大徳寺	当時と同じ場所	
本隠寺	移転	旧地に石碑あり
本能寺	当時と同じ場所	
寺町大雲院	移転	
妙満寺	移転	旧地に説明板あり
対馬藩邸	消滅	石碑あり
方広寺大仏殿	消滅	現在は公園になっている
耳塚	当時と同じ場所	
油小路通, 堺町通, 柳馬場通, 高倉通, 姉小路通	当時と同じ場所	

参考文献

- 仲尾宏「朝鮮通信使と本国（圀）寺」『人権問題研究叢書 15 2014 年度 2015 年度講演録 講座・人権ゆかりの地をたずねて：講演録』京都世界人権問題研究センター，2016 年。
- 仲尾宏「朝鮮通信使と本能寺：一七一九（享保四）年の出来事」『人権問題研究叢書 3 朝鮮通信使と京都』京都世界人権問題研究センター，2011 年。
- 仲尾宏「朝鮮通信使と耳塚 -江戸時代の「耳塚」観と壬辰・丁酉戦乱-」『秀吉・耳塚・四百年：豊臣政権の朝鮮侵略と朝鮮人民の闘い』金洪圭（編），雄山閣出版，1998 年。
- 李景稷（著）若松實（訳）『扶桑録：江戸時代第二次（元和三年）朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会，2000 年。
- 姜弘重（著）若松實（訳）『東槎録：江戸時代第三次（寛永元）朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会，1998 年。
- 慶七松（著）若松實（訳）『江戸時代第一次（慶長十二年）朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会，1997 年。
- 趙曦（著）若松實（訳）『海槎日記〈日記篇〉：江戸時代第十一次（宝暦・明和）朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会，1995 年。
- 雨森芳洲（著）田代和生（校注）『交隣提醒』平凡社，2014 年。
- 源城政好・下坂守編『京都の地名由来辞典』東京出版社，2005 年。
- 村山修二『京都大仏御殿盛衰記』法藏館，2003 年。
- 藤井学・波多野郁夫『本能寺史料』『両山歴譜』日唱本（記録編），思文閣，2002 年。
- 姜在彦『朝鮮通信使がみた日本』明石書店，2002 年。
- 阿部泉『京都名所図会』株式会社つくばね舎，2001 年。
- 上田正昭・辛基秀・仲尾宏『朝鮮通信使とその時代』明石書店，2001 年。
- 水藤真『洛中洛外図屏風を読む：歴博甲本巻 11』歴史民俗博物館振興会，1999 年。
- 横山學『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館，1989 年。
- 岡田信子・岩生成一『京都御役所向大概覚書』清文堂出版，1988 年。
- 佐和隆研『京都大事典』淡交社，1984 年。
- 京都町触研究会『京都町触集成』岩波書店，1983 年。
- 京都市『史料京都の歴史 第 12 巻 下京区』，平凡社，1979 年。
- 平凡社地方資料センター『日本歴史地名大系 27 京都市の地名』，平凡社，1979 年。
- 林燿・宮崎成身等編『通航一覽』泰山社，1940 年。

参考 URL

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ『(改正増補) 京羽二重大全 8 巻』(kyoto-u.ac.jp)
九州国立博物館『対馬宗家文書』対馬宗家文書「大雲院実録」(<https://souke.kyuhaku.jp/>)
東京国立博物館デジタルライブラリー『寛永廿癸未年朝鮮信使記録巻九』(<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/2274>)
文化遺産データベース「本圀寺経蔵(輪蔵)」(<https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/200859>)
公益財団法人世界人権問題研究センター“人権ゆかりゼミ” 仲尾ゼミ『朝鮮通信使』(https://khrri.or.jp/news/newsdetail_2018_08_07_2712.html)
日蓮宗正覚山實相寺(京都上鳥羽) ホームページ(<https://www.kamitoba-jissouji.net/>)
本山龍池山大雲院 ホームページ「京都三遷の歴史」(<https://www.daiunin.or.jp/>)
大光山本圀寺 | 日蓮宗寺院ページ(<https://temple.nichiren.or.jp/5011092-honkokuji/>)
국민일보 2024-10-25 「겨레일살리기국민운동본부 ‘교토 이비충 위령제’ 봉행」(<https://www.kmib.co.kr/article/view.asp?arcid=0020658790&code=61121111&cp=na>)

図版リスト

- 【図1】 今井町本《洛中洛外図屏風》左隻(部分) 個人蔵(『こころの交流朝鮮通信使：江戸時代から21世紀へのメッセージ』京都文化博物館：京都新聞社，2001年，72頁)
- 【図2】 〈唐人雁木旧趾と現在の京都市淀納所周辺〉筆者撮影(撮影日 2022 年 12 月 5 日)
- 【図3】 〈唐人雁木旧趾と淀城周辺〉京都府教育委員会ホームページ文化財保護課「淀城跡寛永十四～明治初頭」に加筆(<https://www.kyoto-be.ne.jp/bunkazai/cms/?p=2291>：閲覧 2023 年 9 月 15 日)
- 【図4】 左：〈淀の水車〉『都名所図会』(天明六(1786)年の再板本) 都名所図会データベース(<https://www.nichibun.ac.jp/meisyozeu/kyoto/>：閲覧 2024 年 8 月 29 日)
右：〈淀駅前の水車〉筆者撮影(撮影日 2022 年 12 月 5 日)
- 【図5】 〈鳥羽作道〉(鳥羽造り道) 巨棕池土地改良区『巨棕池干拓誌』巨棕池土地改良区，1981 年，184 頁。「平安遷都以降豊公伏見城築城頃までの巨棕池およびその沿岸図」に加筆修正。
- 【図6】 〈大名行列の道程(例)〉京学ラボ Web「京都市街モノクロ地図(縦型)」に加筆修正(<https://kyo-gaku.net/>：閲覧 2023 年 9 月 15 日)
- 【図7】 〈朝鮮通信使行列の道程〉京学ラボ Web「京都市街モノクロ地図(縦型)」に加筆修正(<https://kyo-gaku.net/>：閲覧 2023 年 9 月 15 日)

- 【図8】 左：〈實相寺〉『都名所図会』（天明六（1786）年の再板本）都名所図会データベース（<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/>：閲覧 2024 年 8 月 29 日）
右：〈現在の實相寺〉（京都市南区上鳥羽鍋ヶ淵町 524）筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 23 日）
- 【図9】 左：〈大徳寺〉『都名所図会』（天明六（1786）年の再板本）都名所図会データベース（<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/>：閲覧 2024 年 8 月 29 日）
右：〈現在の大徳寺〉（京都市北区紫野大徳寺町）筆者撮影（撮影日 2020 年 9 月 22 日）
- 【図10】 〈現在の油小路通〉
左：〈九条油小路交差点〉（京都市西九条春日町）筆者撮影（撮影日 2021 年 10 月 2 日）
右：〈京都市中京区蛸薬師油小路上ル〉（京都市中京区六角油小路町）筆者撮影（撮影日 2021 年 10 月 2 日）
- 【図11】 左：〈本圀寺〉『都名所図会』（天明六（1786）年の再板本）都名所図会データベース（<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/>：閲覧 2024 年 8 月 29 日）
右：〈本圀寺跡の石碑〉（京都市下京区万寿寺通堀川通西入ル柿本町）筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 23 日）
- 【図12】 〈本圀寺経蔵（輪蔵）〉大光山本圀寺 | 日蓮宗寺院ホームページ（nichiren.or.jp：閲覧 2024 年 10 月 15 日）
- 【図13】 左：本能寺『都名所図会』（天明六（1786）年の再板本）都名所図会データベース（<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/>：閲覧 2024 年 8 月 29 日）
右：〈現在の本能寺〉（京都市中京区寺町通御池下ル下本能寺前町）筆者撮影（撮影日 2022 年 11 月 17 日）
- 【図14】 〈堺町御門〉（時代祭の際の様子）（京都市上京区京都御苑）筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 22 日）
- 【図15】 現在の油小路柳馬場東入周辺（京都市中京区油小路柳馬場東入菊屋町）筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 22 日）
- 【図16】 〈大雲院〉『都名所図会』（天明六（1786）年の再板本）都名所図会データベース（<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/>：閲覧 2024 年 8 月 29 日）
- 【図17】 〈火除天満宮（大雲院跡）〉筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 22 日）
- 【図18】 左：〈妙満寺〉『都名所図会』（天明六（1786）年の再板本）都名所図会データベース（<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/>：閲覧 2024 年 8 月 29 日）
右：〈移築された妙満寺跡の石列〉（京都市中京区押小路通河原町西入ル、京都市役所北側）
- 【図19】 左：〈対馬藩邸跡の石碑〉，右〈高瀬川沿いの対馬藩邸の舟屋跡〉（ともに京都市中京区姉小路通木屋通西入ル恵比須町）筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 23 日）

- 【図20】 左：〈大仏殿〉『都名所図会』（天明六（1786）年の再板本）都名所図会データベース（<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/>：閲覧 2024 年 8 月 29 日）
右：〈現在の方広寺（京都府京都市東山区正面通大和大路東入茶屋町 527-2）〉
筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 23 日）
- 【図21】 《京都大仏殿絵図》（部分）文化遺産データベース，文化庁（<https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/465333>：閲覧 2024 年 9 月 12 日）
- 【図22】 《洛東大佛殿出火圖》（第六，七図）国際日本文化研究センター図書館所蔵（<https://toshonin.nichibun.ac.jp/webopac/BB10539562>）
- 【図23】 左：〈大仏殿公園入口〉，右：〈大仏殿公園〉（京都市東山区大和大路通七条上ル茶屋町 527-2）筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 23 日）
- 【図24】 左：〈現在の大仏正面通と耳塚〉（白枠部分），右：〈耳塚慰霊塔〉（京都市東山区正面通大和大路西入南側），ともに筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 23 日）
- 【図25】 〈慰霊祭の日の耳塚〉筆者撮影（撮影日 2024 年 10 月 23 日）
- 【図①】 〈本圀寺が宿泊地の場合の道程〉京学ラボ Web「京都市街モノクロ地図（縦型）」に加筆修正（<https://kyo-gaku.net/>：閲覧 2023 年 9 月 15 日）
- 【図②】 〈本能寺が宿泊地の場合の道程〉京学ラボ Web「京都市街モノクロ地図（縦型）」に加筆修正（<https://kyo-gaku.net/>：閲覧 2023 年 9 月 15 日）
- 【図③】 〈第 9 回享保 4 年（1719）の朝鮮通信使の宿泊地〉京学ラボ Web「京都市街モノクロ地図（縦型）」に加筆修正（<https://kyo-gaku.net/>：閲覧 2023 年 9 月 15 日）
- 【図④】 〈第 8 回正徳元年（1711）朝鮮通信使の大仏殿を通った際の道程〉京学ラボ Web「京都市街モノクロ地図（縦型）」に加筆修正，（<https://kyo-gaku.net/>：閲覧 2023 年 9 月 15 日）
- 【表 1】 『京都での京都周覧一覧』（『通航一覧』，『朝鮮通信使と江戸の三都』により作成）
- 【表 2】 『朝鮮通信使関連の現在の状況』（実地調査により作成）